日本リスク研究学会
The Society for Risk Analysis Japan

2012 Newsletter No.3-4 [Volume.25]
発行日 2013 年 2 月 10 日
発行 一般社団法人日本リスク研究学会
会長 甲斐倫明
事務局 〒169-0075 東京都新宿区高田馬場 4-4-19 株式会社国際文献印刷社内
日本リスク研究学会事務局 発行責任者・情報管理委員会 瀬尾佳美
TEL：03-5389-3013 FAX：03-3368-2822
mail: sra-japan@bunken.co.jp URL: http://www.sra-japan.jp/cms/

日本リスク研究学会は，日本におけるリスク研究と研究者相互の交流を図ることを目的として，1988 年に米国に本部をもつ国際的なリスクについての学術団体である SRA(The Society for Risk Analysis)の Japan section として発足しました。現在では，米国，欧州，東南アジアの諸学会と緊密な連携をとりつつ独自の活動を展開しています。

1. From the president

リスク研究学会会長 甲斐倫明

日本リスク研究学会は創立から 25 年が経ち、現在およそ 600 名あまりの会員を抱える学会になりました。2010 年には社団法人化して、一般社団法人日本リスク研究学会となって現在に至っています。

今こそ、社会がリスク問題に関心の高い時代はこれまでにはなかったでしょう。これは、東日本大震災による巨大津波による未曾有の被災を経験したこと、福島第一原子力発電所事故によって放射性物質による甚大な環境汚染を招いたことが契機となっています。

この問題を受けて、私たちの学会は、低頻度大規模災害に対する東日本大震災についてシンポを開催したり、リスク学の視点からの分析を学会誌に特集で掲載してきました。また、東日本大震災対応特別委員会(委員長：池田元会長)は、我が国から発信した論文の英文冊子の編集を行い、海外に発信しようとしています（近日中に学会 Web から発信されます)。

リスク問題は、社会と専門家との間にギャップがあることが注目されますが、分野が少し異なると専門家同士でさえも違った認識があることがより大事な問題であると考えています。 これは、リスク問題がサイエンスの問題だけでなく社会的価値判断や倫理を含んだ側面をもっているからでもあります。例えば、リスクコミュニケーションが社会では注目され、様々な分野でこの言葉で用いられています。しかし、その意図することや、社会が受け取る意味にギャップが生じていています。リスクは、その現実世界でのサイエンスが基礎となり、その限界と不確かさを認識することで、抽象的あるいは理論的な概念として理解されるべきものと考えています。そのためには、リスク学の貢献が今こそ求められる時代はないでしょう。そのためにはリスク学のさらなる発展が求められます。

滋賀大学で開催された昨年の研究発表会のサテライト「若手ワークショップ」では、学会活動に対する前向きな提案をいただきました。学会理事会は、研究発表会と学会誌以外の日常的な活動の場として、学会員の提案によってタスクグループを設置し、リスク学に関する問題について検討し、学会内外に発信してもらおうということにしました。本学会の特徴を生かして、他学会では不可能な学際的な場としてリスク学を深め、発展していく仕組みとして本学会を利用していただければと考えています。

一方で、東日本大震災はリスク学の観点から国際的にも注目されています。これを契機にして、リスク学の世界との接点をさらに拡大していく必要があります。米国の SRA、JRR の共同刊行をしている SRA-Europe、韓国、中国および台湾などの東アジア、さらにはリスクワールドの国際的な場において、日本リスク研究学会が活躍するために、本学会員の皆様のさらなる活動と協力をお願いいたします。

2. 報告

2.1　2012 年度日本リスク研究学会　第 25 回年次大会報告

大会実行委員長　久保英也

2012 年は日本リスク研究学会にとって創設から四半世紀を迎える節目の年であり、その年開催される年次大会は特別な意味がありました。2012 年 11 月 8 日（金）～10 日（日）に滋賀大学で開催されました日本リスク研究学会大会は、「リスク研究学会創設 25 年記念大会」とし、改めて同学会の活動を総括し、新しい時代のリスク研究や学会のあり方を共に考える場としました。

本学会の設立趣意書には「我が国においても、防災、医療、公衆衛生、安全、公害、環境汚染などのリスク問題は、自然科学、医学、工学、社会科学等の個別分野ごとに研究されてきましたが、高度 産業技術社会をむかえて、学際的でかつ国際的な視野をもったリスク分析とリスク管理の必要性が認識されてきました。関連研究分野におけるリスク研究の相互理解と協力を促進すると共に、これまでの国際交流をさらに継続発展させ、国際的な連携を深める」とあり、自然科学、工学、社会・人文科学等の専門分野を越えて多方面の研究者の参加を呼び掛けています。

大会テーマは、この学会創設の趣旨が果たされてきたのかを検証する共に次の時代を睨み、「日本リスク研究学会、噛みしめる 25 年の重みと駆け上がる次の 25 年」をとしました。参加者は 150 名とコンパクトではありましたが、シンポジウム１、企画セッション４（若手のワークショップを含む)、総報告数 60 本（ポスターセッション 4 を含む）と密度の濃い大会になりました。スタートの若手のワークショップでは、今後の日本リスク研究学会の在り方について熱っぽい議論が行われ、シンポジウムでは我々と同じ部門横断的な学会の悩みと今後の方向を多面的に議論しました。城山英明東京大学政策ビジョン研究センター教授を基調講演者に、①仲勇治 安全工学会会長 (横断的リスク評価の可能性、工学の視点から)、②原科幸彦 千葉商科大学教授、東京工業大学名誉教授（環境アセスメントの視点から)、③平川秀幸 大阪大学コミュニケーションデザインセンター准教授（リスク議論と市民参加の視点から)、④土田昭司 関西大学社会学部教授（日本リスク研究学会元会長、学会の創設趣旨、課題）をシンポジストに、そしてモデレーターには長坂俊成 防災科学技術研究所災害プラットホーム研究プロジェクト・リスク研究グループ長（日本リスク研究学会前会長）を起用する豪華な布陣となりました。

その結果、分野横断的学会の強みと弱みや新しいリスク研究の方向性：たとえば、①自然科学、工学、社会・人文科学等の専門分野をどのようにして越えることができるのか？②そもそも専門分野研究ではない部門横断的リスク研究はその成果を実業、実社会に還元できるのか？③学際的で国際的をどのように実現するのか？などについて議論が深まったと考えております。

今後はこれらの議論を実際の学会運営に生かし、具体的な形にしていきたいと考えています。

2.2　Society for Risk Analysis 2012 Annual Meeting 参加報告

産業総合研究所　梶原秀夫

2012 年 12 月 9 日（日）から 12 日（水）にかけて、米国サンフランシスコ（会場：Hyatt Regency San Francisco）で行われた Society for Risk Analysis（SRA)の 2012 年年会に参加した。当地は、厳寒の東海岸とは異なり気候が穏やかで、風景明媚、食事もおいしいところで、毎年この辺で年会をやってほしいという声も多かった。（写真①：レトロな路面電車（F-line)、写真②：ゴールデンゲートブリッジ）

そんなロケーションの良さもあってか、年会参加者は 781 名と昨年(670 名）より 100 名以上多く、発表も口頭 429 件、ポスター169 件と、盛りだくさんであった。

以下、印象に残ったいくつかのセッションの感想を記す。

"Indoor Air & Products: Exposure &Risks"ではワシントン大学のグループによる、タバコ由来のニコチンを指標にした室内の難揮発性有機化合物（SVOC）の経皮暴露の評価や、米国 EPA による開発中の暴露評価モデル(EPA-Expo-Box)の紹介が目をひいた。後者は特に暴露係数などのデータをあらかじめ搭載したウェブ上での推計ツールであり、我々も消費者製品由来の暴露評価を検討しているため興味深かった。

"Challenging the Linear-No-Threshold Dose-Response Model"は、今回聴講した中で最も盛り上がったセッションで、LNT モデルに対して異なる専門や立場からの意見が出された。毒性学や疫学の研究者が、「閾値あり」の科学的証拠を示し LNT モデルを否定する方向の主張をするのに対し、米国 EPA の研究者が LNT モデルのレギュラトリーサイエンスとしての必要性を主張する構図が印象深かった。これは現在の日本の放射線リスクをとりまく状況にも通じるものがあると感じた。

"Combining Life Cycle Assessment, Valuation and Cost-Benefit Analysis"では、LCA と費用便益分析との結合という問題設定が、筆者が所属する産総研安全科学研究部門の課題と共通していて興味深く聴講した。細部までは理解できなかったが、LCA にリスクの地理的分布を持たせるという課題にチャレンジした研究例が紹介され大変参考になった。

私自身は「自動車塗料の溶剤系から水系への代替に対するリスクトレードオフ評価」についてポスター発表を行った。リスク削減対策の費用対効果など「金銭単位」の結果には注目を示していただいたが、集客自体が少なかったため、今後インパクトがありわかりやすい発表資料を作るように努力したい。

3. 委員会報告

3.1　リスリスクマネジャ認定委員会からの報告

神田玲子

背景

リスクマネジャとは、リスク評価、リスクコミュニケーション、リスクマネジメント能力を有し、社会においてリスクに対処する能力があるとリスク研究学会が認定した者に与えられた称号です。制度の発足当時(2006 年)は、①当学会が定める認定・審査基準を満たした教育プログラムを「リスクマネジャ養成プログラム」として認定し、②このプログラムの修了生本人が当学会へ申請してきた場合、リスクマネジャとして「登録」しておりましたが(「課程修了者登録」)，2008 年には③リスクマネジャ委員会が定める要件を満たす場合もリスクマネジャとして認定する「書類審査者登録」制度もできました。

リスクマネジャ養成プログラム認定第一号であった大阪大学「環境リスク管理のための人材養成」プログラムが 2010 年に終了して以降、学会がリスクマネジャ養成と認定に直接関わることになりました。また学会の法人化により、事業活動と経理面においてこれまで以上の透明性が要求されるようになったことから、前リスクマネジャ委員会委員長である関澤純先生は、①委員会規程と、②書類審査者登録における資格認定の判断基準の明確化に大変ご尽力なさいました。詳しくは当委員会 HP をご覧ください。

http://www.sra-japan.jp/riskmanager/index.html

活動報告

昨年 8 月に理事会の指名により今期の委員会が正式に発足いたしました。メンバーは岸本充生先生（産総研）、前田恭伸先生（静岡大学）、宮崎隆介先生（日本リスクマネジャネットワーク）、村山武彦先（東工大）と私（放医研）ですが（委員会規程で委員は 5 名を定められています）、関澤純先生にアドバイザーとして、また小林剛先生と吉田佳督先生（名古屋大）には小委員会メンバーとして議論にご参加いただいています。

昨年 10 月には全学会員を対象に、「リスクに関わる人材育成の実態」に関するアンケートを実施いたしました（ご協力ありがとうございました）。また 11 月の年次大会では、企画セッション「オープンディスカッション～リスクマネジャの社会的役割と学会の支援～」を企画し、リスクマネジャの社会的役割を「見える化」するための活動について、リスクマネジャと学会員が知恵を出し合いました。

アンケートと企画セッションで得た情報をもとに、現在は、リスクマネジャ養成プログラム認定の「審査の手引き」の改正について検討しております。審査基準は変更せず、申請手続きを簡略化することで、リスクマネジャ養成プログラム認定制度に参加しやすくなることをねらっています。

また当委員会では、リスクに係る人材育成に関する情報共有にもお役にたちたいと思っております。リスクマネジャ認定プログラムとは別に、大学等での活動やリスクに関する知識や技術向上のためのセミナー等も委員会 HP 上でご紹介しておりますので、情報等をお寄せいただけると幸いです（riskmanager@sra-japan.jp）。

3.2　情報管理委員会報告

前田恭伸

SRA International ウェブサイトの更新

2012 年 12 月、Society for Risk Analysis のウェブサイト(http://www.sra.org/)が大幅に更新されました。見

かけが視覚的にわかりやすくなっただけでなく、Career Opportunities やリスクアナリシスについての Teaching Resources などの内容も増えました。

また、日本リスク研究学会のようなリージョン組織や、スペシャリティグループがそれぞれのウェブページをサイト内に持てるようになりました。日本のページはまだ準備中ですが、近々公開の予定です。しばらくお待ちください。

図　：SRA の新しいトップページ(http://www.sra.org/)

4. 編集後記

春節に 2012 年度最後のニューズレターをお届けいたします。2012 年度は、豪州でワールドコングレスがあり、またサンフランシスコの SRA も大盛況で、なにかと楽しい年でありました。日本リスク学会も 25 周年を迎え、理事会のメンバーが新しくなるなど、飛躍の年であったと思います。2013 年度、ますますの発展の年となるよう願ってやみません。

青山学院大学　瀬尾佳美